

# 東京都立高等学校の男女別定員と 日比谷高等学校の男女共学制の導入

今 田 絵 里 香

## はじめに

本稿は、東京都立日比谷高等学校（以下、高校）の生徒が男女共学制導入をどのように捉えたのかを明らかにする。

戦後、東京都が初めて全公立高校に男女共学制を導入させたとき、大きな弊害はなかったとされている。東京都は1949年4月1日に男女共学制をいくつかの公立高校に導入させ、1950年4月1日には男女共学制を全公立高校に導入させた。東京都教育委員会の『東京都の教育』1951年度では、1949年度から1951年度までに関して、「男女共学そのものについての甚しい弊害は報告されていない」（『東京都の教育』1951年度：118）と把握されている。しかし本当に弊害はなかったのだろうか。あるいは、弊害が報告されなかったとすると、なぜ弊害は報告されなかったのだろうか。本稿はこのような問いに取り組むこととする。

そしてこのような問いに取り組むにあたって、本稿は東京都立日比谷高校に焦点を当てることとする。日比谷高校は東京府立第一中学校を前身とする高校である。戦前、この東京府立第一中学校は全中等学校の頂点に君臨していた。そして戦後、日比谷高校はある時期まで全高校の頂点に君臨しつづけていた。そうであるとする、日比谷高校は模範となる高校として全高校に常に参照されていたと推測することができる。いいかえると、日比谷高校の他の高校に及ぼす影響力は非常に大きいと捉えることができる。そのため、日比谷高校の男女共学制の導入を検討することとした。いったい日比谷高校の生徒は男女共学制の導入をどのように捉えていたのだろうか。男女共学制の導入は弊害がないと捉えていたのだろうか、それとも弊害があると捉えていたのだろうか。

本稿の意義は、東京都の男女別定員による男女共学制導入が生徒たちにどのような影響を与えたかを明らかにできることである。2018年8月2日、東京医科大学がひそかに男女別定員を設定していたこと、そして女子の数が入学者の3割を超えないように入学試験の点数を操作していたことが問題視された（「東京医大、女子を一律減点 受験者に説明なし 二〇一〇年ごろから」『朝日新聞』2018年8月2日）。そしてその後、東京都立高校の全日制普通科が男女別定員を設定して入学試験を実施していることも、問題視されるようになった（「都立高入試の男女別定員、今も 合格

ラインに差 全国的には異例』『朝日新聞』2019年2月9日)。このような動きを受けて、東京都教育委員会は2021年9月24日、東京都立高校の全日制普通科が入学試験において設けている男女別定員について、段階的に廃止することを決定した(「都立高入試の男女別定員、段階的に廃止へ 合格ラインに男女差」『朝日新聞』2021年9月24日)。このように、男女別定員がジェンダーを理由にした不当な差別であると問題視されるようになった現在、男女別定員による男女共学制導入が当時の生徒たちにどのような影響をもたらしたのかを明らかにすることは、大きな意義があると思われる。

東京都公立高校の男女共学制導入に関しては、小野寺みさき(2013、2014)が男女別定員、および、男女共学制の導入過程を明らかにしている。今田絵里香(2021)も男女別定員、および、男女共学制の導入とその背後に存在した東京都特有の理由を解き明かしている。しかし、それぞれの高校の生徒がどのように男女別定員、および、男女共学制導入を捉えていたのかについては明らかにされていない。そこで本稿は戦前および戦後のある時期まで、すべての中等学校および高校の頂点に君臨しつつけた、東京都立日比谷高校に焦点を当ててそのことを解き明かすこととする。

本稿は生徒の把握の仕方を明らかにするため、当時の生徒が刊行した新聞、および、雑誌を分析する。分析史料は『日比谷高新聞』『星陵』とする。『日比谷高新聞』は日比谷高校新聞部が刊行している新聞である。刊行頻度は1年に5～9回、刊行費用は広告収入、および、生徒会の援助とされている。1953年10月には、刊行費用不足に陥ったため、文化祭にて最新3号分を10円で販売している(『日比谷高新聞』30号〔1953年10月16日〕)。一方、『星陵』は日比谷高校雑誌部が刊行している雑誌である。刊行頻度は1年2回(9～10月、2～3月)、刊行費用は1号(1952年3月号)から5号(1954年2月号)までは広告収入、6号(1954年10月号)からは生徒会の援助とされている。

『日比谷高新聞』『星陵』は日比谷高校生徒の把握の仕方を捉えるためにもっとも適した史料だと思われる。なぜなら、それらが日比谷高校のなかで「特殊部」の刊行する新聞、および、雑誌とされていたからである。日比谷高校では、新聞部および放送部は「特殊部」として扱われている。また雑誌部は、『星陵』6号(1954年10月号)から「特殊部」として扱われるようになっている(「特集 星陵10号の歩み 昭和26年11月～昭和31年8月」『星陵』10号〔1956年9月号〕)。そしてこの「特殊部」は他の部に比べて、生徒会の予算配分において特権的な扱いを受けることになっていた。そのため「特殊部」である新聞部、放送部、雑誌部は、全生徒の利益になることをめざして、生徒の関心のあるできごとを新聞、放送、雑誌で扱わざるを得なかった。たとえば雑誌部は「編集方針について「一、特殊部としての性格を忘れない。(中略)「雑誌部は全校のものである」「全校生徒内での連絡機関である」とは通例の解釈であろう」(明石紀雄「編集後記」『星陵』11号〔1957年3月号〕)として、雑誌部は全校生徒のもの、全校生徒の連絡機関であると語っていた。新聞部は「『日比谷高新聞が幼稚で会員に貢献することの少い官報新聞だ」(中略)幼稚とは何か、もしイデオロギイに対して日比谷高新聞は無智であると云うのなら、われわれはその人こそ幼稚だといお

う、日比谷高新聞は学校新聞である、読者は日比谷高に関することを知るためにこの新聞を読むのだ」(「論説 新聞部の立場」『日比谷高新聞』9号〔1951年5月9日〕)とし、『日比谷高新聞』が全校生徒に貢献していないという批判に反論して、『日比谷高新聞』は「学校新聞」として矜持を持っているとし、全校生徒のための新聞として機能しているとして語っていた。

というのも、「特殊部」という特権的な扱いは、常に生徒たちの争いの火種となってきたからである。たとえば1951年5月4日、1951年度第1回定例生徒総会にて、「新聞部を一般校内団体に格下げせよ」という爆弾動議が(中略)提出され、議場は一時拍手と怒声のるつぼと化した」(「50円案通過 十四票差で辛くも成立 冒頭新聞部問題でもむ」『日比谷高新聞』9号〔1951年5月9日〕)というできごとが起こっている。理由は、「新聞の内容が幼稚で全員に貢献する事の少い官報新聞だ」(「50円案通過 十四票差で辛くも成立 冒頭新聞部問題でもむ」『日比谷高新聞』9号〔1951年5月9日〕)というものであったが、『日比谷高新聞』は「新聞部の特殊性が問題ではなく一万六千という巨額の新聞部予算が全員の不満を買う点が多かったと見られる」(「50円案通過 十四票差で辛くも成立 冒頭新聞部問題でもむ」『日比谷高新聞』9号〔1951年5月9日〕)と分析している。結局、賛成299票、反対359票で否決されたが、「賛否とも過半数に達せず、後味の悪い解決であった」(「50円案通過 十四票差で辛くも成立 冒頭新聞部問題でもむ」『日比谷高新聞』9号〔1951年5月9日〕)と振り返っている。このように「特殊部」という特権的な扱いが常に生徒たちの争いの火種になっていたため、『日比谷高新聞』、および、『星陵』は、生徒たちの利益になることをめざして、当時の生徒が関心を払っているできごとを反映しようとしていたのである。そのため、当時の生徒たちの関心を明らかにするためには、もっとも適している分析史料であると捉えることができる。

分析期間は創刊の年度から1955年度末までとする。『日比谷高新聞』は創刊号が1950年4月26日号、『星陵』は創刊号が1952年3月号である。東京都においては、小野寺(2013)が指摘するように、男女共学制は学区制とともに導入された。そしてその学区制は、1949年3月5日に「東京都公立高等学校通学区域に関する規則」が制定されることによって導入され、1956年2月4日にそれが改正されることによって変更された。このことを踏まえると、男女共学制は学区制とともに1949年度のはじめから導入され、1955年度のおわりまでにいったん整えられたと捉えることができる。そのため、1955年度末を区切りとする。したがって『日比谷高新聞』は1950年4月25日号(1号)から1956年3月16日(47号)まで、『星陵』は1952年3月号(1号)から1956年3月号(9号)までを分析する。このように『日比谷高新聞』『星陵』を創刊の年度から1955年度末まで分析することで、男女共学制の導入が生徒たちにどのように把握されていたのかを明らかにすることができると考えられる<sup>1)</sup>。

## 1 東京都の男女別定員による男女共学制の導入

最初に、今田（2021）に基づいて東京都公立高校の男女共学制導入を概観することにする。いったい東京都公立高校の男女共学制はどのようにして導入されたのだろうか。この問いにたいして答えを見つけることとする。

東京都の新制高校が誕生したのは1948年4月1日のことである。1948年5月1日、東京都の新制高校は官立2校、公立108校、私立258校、合計368校であったとされている（『教育時報』7号〔1948年8月号〕：見返し）。東京都は新制高校を発足させるにあたって、男女共学にするかどうかをそれぞれの旧制中等学校に任せることにした（今田 2021）。その結果、新制高校はすべて男女別学の高校として誕生することになった。したがって、東京都の新制高校は、旧制中学校を前身とする男子のみの高校（以下、旧制中学系の高校）、旧制高等女学校を前身とする女子のみの高校（以下、旧制高女系の高校）、旧制実業学校を前身とする高校が、旧制中等学校の枠組みを引き継ぐ形で誕生することになったのである（今田 2021）。このように新制高校が生まれるなかで、東京府立第一中学校を前身とする東京都立第一中学校は1948年4月1日、男子のみの高校である東京都立第一新制高校として誕生することになった。また、東京府立第一高等女学校を前身とする東京都立第一高等女学校は1948年4月1日、女子のみの高校である東京都立第一女子新制高校として誕生することになった。いうまでもなく、前者の東京府立第一中学校は戦前、男子の中等学校の頂点に君臨していた中等学校で、後者の東京府立第一高等女学校は戦前、女子の中等学校の頂点に君臨していた中等学校である。

ところが、東京都軍政部が東京都に圧力をかけてきたため、東京都は男女共学制を導入せざるを得なくなった（今田 2021）。そこで1949年4月1日、東京都はそれぞれの高校に男女の募集定員および入学定員を一任して、原則として男女共学制を導入するように促した（今田 2021）。しかし、それぞれの高校に男女の募集定員および入学定員を一任したため、男女共学になった高校とならなかった高校があらわれることになった。全日制の高校では、101校のうち52校しか、全日制普通科の高校では旧制中学系の高校で15校、旧制高女系の高校で25校、合計40校しか男女共学にならなかったのである（『東京都教育概要』1949年度：163-164）。

東京府立第一中学校を前身とする第一新制高校は、1949年4月1日に男女共学にならなかった高校である。しかし、1949年度の募集定員を見ると、男子40名、女子10名となっている（『朝日新聞』1949年3月13日、『読売新聞』1949年3月13日）。もしこの募集定員のとおり男女が入学したならば、男女共学になったはずである。それにもかかわらず、女子は1949年度には1人も入学しなかった。女子は1950年度になってはじめて入学することになったのである（日比谷高校百年史編集委員会 1979）。なお、第一新制高校の1949年度の募集定員が男女ともに少ない理由は、第一新制高校が1948年4月1日に附設中学校を設置し、旧制東京都立第一中学校の第3学年の生

徒をそこに在籍させ、1949年4月1日にその生徒を第一新制高校に入学させることを予定していたためである(日比谷高校百年史編集委員会 1979)。

一方、東京府立第一高等女学校を前身とする第一女子新制高校は、1949年4月1日に男女共学になった高校である。この高校は男女それぞれ100名の募集定員を設定し、女子100名、男子88名が入学している(東京都立白鷗高等学校 1989)。ただし、女子100名の募集定員の内訳は、70名が附設中学校の第3学年の数、30名が新たに募集した定員の数である。

また1949年4月1日、東京都は1学区に複数校を配置する中学区制を導入した(今田 2021)。この中学区制導入によって、東京都全体が第1～10学区に分けられ、島嶼部を除き、1学区9～12校の高校を擁するようになった。ただし当分の間、第7～9学区は1学区とみなされることとなった。また学区制を導入するのは全日制普通科の高校74校のみとされた。したがって、定時制および全日制職業科の高校は学区制を導入しないことになったのである。そしてこの中学区制導入に基づき、第一新制高校(千代田区)は第1学区、第一女子新制高校(台東区)は第5学区に分類されることになった。

このように1949年4月1日は男女共学になった高校、ならなかった高校があらわれることになったため、東京都は1950年4月1日には制度の変更をせざるを得なくなった。そこで東京都は、全日制普通科の高校に男女別の募集定員を設けさせ、その男女比をそれぞれの高校に任せることにした(今田 2021)。ただし、この募集定員を最終的に決定するのは東京都教育庁の教育長であるとした(今田 2021)。また、男女の入学定員は男女の募集定員どおりに定めなければならないとした(今田 2021)。したがって、男女を募集定員どおりに受け入れなければならないとしたのである。そのため、もし男子あるいは女子の応募者数が募集定員を超過したならば、男子のみあるいは女子のみで選抜をおこなわなければならないとし、もし男子あるいは女子の応募者数が募集定員に満たなかったならば、男女別定員を設けた全日制普通科、全日制職業科、定時制の高校は、選抜なしで男子あるいは女子の応募者の入学を許可することを原則とし、第二次募集をおこなわなければならないとしたのである(今田 2021)。その結果、東京都の公立高校はすべて男女共学となった。しかし多くの高校では、男女の数に大きな差をつけて男女別定員を設けたため、男女の入学者数に大きな偏りが生まれることになった。

東京都全体を見ると、旧制中学系の高校は男子の定員を、旧制高女系を前身とする高校は女子の定員を多めに設定し、募集している傾向が見てとれる(今田 2021)。たとえば旧制中学系の第一新制高校は、1950年1月26日に日比谷高校と改称し、1950年4月1日に男子300名、女子100名の募集定員で男女共学制を導入している。したがって男子を多めに入学させようとしている。一方、旧制高女系の第一女子新制高校は、1949年4月1日に男女それぞれ100名の募集定員で男女共学制を導入している。ところが、1950年1月26日に白鷗高校に改称した後、1950年4月1日には男子150名、女子250名の募集定員を設定し、女子を多めに入学させようとしていることが見てとれるのである。



このように東京都公立高校の男女共学制導入の歴史を辿ってみると、1948年度に男女別学の新制高校が発足し、1949年度には男女共学制を導入したものの、募集定員・入学定員をそれぞれの高校に一任したため、募集定員と入学定員が乖離する事態が生まれ、全日制の高校101校のうち52校しか男女共学にならなかった。1950年度には全日制普通科の高校に男女別の募集定員・入学定員を設けさせ、募集定員と入学定員が乖離する事態を阻止するべく、募集定員どおりに入学定員を設定させることにした。そのため、全高校が男女共学になった。このような歴史の変遷を辿ったことになる。

## 2 新制・旧制の差異

日比谷高校の生徒は男女共学制の導入をどのように捉えていたのだろうか。ここから『日比谷高新聞』『星陵』を分析して、日比谷高校の生徒が男女共学制導入をどのように捉えていたのかを明らかにすることにする。

最初に、男女共学制導入直後に日比谷高校の生徒が男女共学制導入をどのように把握していたのかを解き明かすことにする。すでに見たように、日比谷高校は1950年4月1日、男子300名、女子100名の募集定員を設定し、男女共学制を導入することになった。また1950年4月7日には入学式を実施し、男子312名、女子90名を入学させることになった（日比谷高校百年史編集委員会 1979）。そして新1年生の8ルーム（11～18ルーム）のうち、11、15、17、18の4ルームが共学のクラス、他は男子のみのクラスとすることにした（日比谷高校百年史編集委員会 1979）。いったい日比谷高校の生徒たちは男女の新生が入学することになったことをどのように把握しようとしていたのだろうか。

すでに見たように、日比谷高校は戦前、東京府立第一中学校として男子の中等学校の頂点に君臨していた。戦前、数字を校名に入れた「ナンバーズクール」の中学校は名門校とされ、東京府立第一中学校はその「ナンバーズクール」の頂点に君臨し、その名を轟かせていたのである。そして戦後、新制高校移行後の1950年代においても、「ナンバーズクール」はその名門校の伝統を維持し続け、日比谷高校はその「ナンバーズクール」の頂点に君臨しつづけていた。たとえば、1956年に東京大学合格者を多数輩出した高校は、もっとも多数輩出した高校から順に、東京都立日比谷高校（旧・東京府立第一中学校）98名、東京都立小石川高校（旧・東京府立第五中学校）73名、東京都立西高校（旧・東京府立第十中学校）63名、東京都立戸山高校（旧・東京府立第四中学校）60名、東京都立両国高校（旧・東京府立第三中学校）55名、私立麻布高校44名、東京都立新宿高校（旧・東京府立第六中学校）43名、東京都立小山台高校（旧・東京府立第八中学校）29名、国立東京教育大附属高校（現・筑波大学附属高校）38名、埼玉県立浦和高校32名となっている（東京都立教育研究所 1966：341）。また、東京都立日比谷高校は1956年から1965年までの10年間、98名、107名、125名、168名、141名、166名、184名、167名、193名、181名の東京大学合格者を輩出し、

頂点を維持しつづけている(東京都立教育研究所 1966:341)。このように東京大学合格者を多数輩出する高校を見ると、戦前の東京府の「ナンバーズクール」が多数を占めること、日比谷高校がそのなかでも頂点に君臨していることがわかる。

このような男子の名門校に女子が入学するということについて、日比谷高校の生徒がどのように捉えていたのかをしてみることにする。『日比谷高新聞』1号(1950年4月25日)では、新入生による座談会が開催され、新入生たちが上級生について次のように語っている。

越山(越山康雄——引用者) 上級生が非常にルーズで仕事のがろい、先生がびびりしやるのを歓迎する(中略)。

毛利(毛利節子——引用者) ルーズすぎます、生徒も先生も(中略)。

小川(小川登代——引用者) 対面式の時はがっかりしました、私達だつたらあんな真似はしなかつたでしょう。

岡田(岡田佐和子——引用者) 上級生を見誤つたかと思ひ落胆しました、もつと規律を考えて欲しいものです。(中略) 校内団体が個々にはまとまっていますが学校全体を向上させる協力的に欠けているんじゃないですか？

小川(小川登代——引用者) 自分のやる事は全体に関連しているという事を常に自覚していなければいけないと思います。(「新入生座談会 第一印象を語る 学校を生活の場所に がっかりした対面式の醜態」『日比谷高新聞』1号〔1950年4月25日〕)

一方、『日比谷高新聞』2号(1950年6月6日)では、上級生による座談会が開催され、上級生たちが新入生について次のように語っている。

遅塚(遅塚忠窮——引用者) ルーズといつても、我々にとつては、教師にピシピシやられるのよりもいいだろう、過去の規律はまつびらだ。(中略)

馬場(馬場信久——引用者) しかしとにかく、俺達は戦争で苦しめられているんだから、戦争的な規律、つまり上からの号令などは嫌なこつた。(中略)

河崎(河崎齊——引用者) しかし一年生も、始めのうちはもつとなにかを持っていると思つていたが、それは表面的にそう見えただけらしい、少しがっかりしているよ。(中略)

遅塚(遅塚忠窮——引用者) 何か個性の無い感じだな。中学を通つて来たのだから、もつと個性が強い筈だ。(中略)

江頭(江頭淳夫——引用者) (中略) 個性が無くて不粋だ、しかし女の人はどつちかという個性性的かも知れない。(「上級生座談会 第一印象を語る 個性の欠けた“六三型” 伝統へのノスタルジアはごめん」『日比谷高新聞』2号〔1950年6月6日〕)

この二つの記事を見ると、新入生／上級生が比較され、「秩序」／「無秩序」、「没個性」／「個性」という枠組みで把握されていることが見てとれる。新入生は、集団として見た場合は秩序を保っているものの、だからこそ個人として見た場合は一人ひとりがまわりの人びとに合わせて没個性になっているとされている。逆に、上級生は集団として見た場合は無秩序であるものの、だからこそ個人として見た場合は一人ひとりが自由にふるまって個性をきわだたせているとされているのである。このように新入生／上級生がまったく異なる存在として把握されていたといえる。むしろ新入生のうち女子生徒は、旧制中学系の高校に入学するという、「男子は中学校（旧制中学系の高校）」「女子は高等女学校（旧制高女系の高校）」という戦前戦後のジェンダー秩序を転覆させる行為をしたことで「無秩序」、また大勢の女子生徒とは異なる進路を選択したことで「個性」を象徴する存在として見なされ、上級生のアイデンティティに近い存在として捉えられていたのである。

このような把握の仕方は他の記事にも見られる。たとえば、1950年度に2年生であった生徒たちが卒業する1952年3月、1～3年生の座談会が開催され、1年生の「松本貞子」が「三年の方には確かに良い意味の自由と個性の強さがあると思いますけど、概して一二年はからの中にとじこもつていて大きい物を求めて歩いて行くといった態度がみられないように思います」（『座談会 日比谷高生活を語る なかよくしよう 淋しくなった生徒会』『日比谷高新聞』16号〔1952年3月14日〕）と語っている。この記事においても、1、2年生は没個性的であるとされ、3年生は個性的であるとされているのである。

また、新入生と上級生は見た目も大きく異なっていたようである。1950年に新入生として入学した小川登代は、のちの1958年に、上級生について「たかが一つか二つの年の差とは思いながらも、時々見かける黒マントにほう歯（朴歯下駄——引用者）姿は、ちょっと手のとどかない一段上の存在の象徴に見えた。（中略）新中卒にはない独自性というか特異性というかが彼等にはあって、一人々々がそれを強調している様であった」（如蘭会 1958：392）と回想している。この回想からわかるように、上級生は黒マントをはおって朴歯下駄を履いていたため、新入生と大きく異なる見た目をしていた。そしてそのこともあって、上級生は新入生にとって「独自性」「特異性」をもっているように映っていたのである。

このように1950年4月は新入生も上級生もそれぞれ異なるアイデンティティをもっているとされていたことがうかがえる。なぜなのだろうか。この1950年4月1日、日比谷高校1年生は新制中学校卒業生で占められているが、2、3年生の大多数は附設中学校卒業生で占められている。というのも1947年4月1日、旧制東京都立第一中学校は学制改革の移行措置として、4、5年生を旧制東京都立第一中学校の生徒とし、2、3年生を附設中学校の生徒としたからである（日比谷高校百年史編集委員会 1979）。この附設中学校の生徒になった者たちこそ、1950年4月1日の日比谷高校の2、3年生なのである。したがって附設中学校の卒業生はもともと旧制東京都立第一中学校の生徒だったといえる。そのため日比谷高校の2、3年生は「旧制東京都立第一中学校の生徒」というアイデンティティをもっていたのである。



このことを踏まえると、1950年4月は旧制・新制の差異が大きなものとして存在していたといえる。そのため、男女の差異が見えにくくなっていたと把握することができる。むしろ新制の生徒のうち女子生徒は、旧制中学系の高校に入学するという、「男子は中学校（旧制中学系の高校）」「女子は高等女学校（旧制高女系の高校）」という戦前戦後のジェンダー秩序を転覆させる行為をしたことで「無秩序」、また大勢の女子生徒とは異なる進路を選択したことで「個性」を象徴する存在として見なされ、「旧制東京都立第一中学校の生徒」のアイデンティティに近接する存在として捉えられていたといえる。そのため、ますます男女の差が見えにくくなっていたと考えることができる。東京都教育委員会の『東京都の教育』1951年度では、1949年度から1951年度までに関して「男女共学そのものについての甚しい弊害は報告されていない」（『東京都の教育』1951年度：118）とされている。このように男女共学制導入による甚だしい弊害が報告されていなかった要因の一つとして、男女共学制が導入された1950年4月には、黒マントと朴歯下駄を身につけた旧制のアイデンティティをもつ2、3年生と、新制のアイデンティティをもつ1年生の差異が大きなものとして把握され、新制の生徒のなかに存在する男女の差異は小さなものとして把握されていたため、大きな混乱にはつながらなかったということも指摘できる。

### 3 男女の差異

ところが、『日比谷高新聞』においては、1951年4月から男女の差異を指摘する記事が増加する。1952年3月に創刊された『星陵』においても、男女の差異に着目する記事が掲載されている。1951年3月に旧制のアイデンティティをもつ3年生が卒業し、1951年4月に新制のアイデンティティをもつ1年生が入学したことで、新制のアイデンティティをもつ生徒の数が旧制のアイデンティティをもつ生徒の数を上回ることになった。そのため、新制のアイデンティティをもつ生徒のなかに存在していた男女の差異が見えるようになったと推測することができる。ここでは『日比谷高新聞』『星陵』で指摘された男女の差異がどのようなものであったかを見ることとする。

『日比谷高新聞』でも『星陵』でも男女の差異は当然視されていて、第一に、学力に差があると把握されている。男女の学力を比べると、女子の学力のほうが低いとされているのである。たとえば次の記事にそのような把握の仕方を見ることができる。

数学科・岡田先生（中略）去年は実に男子と女子とは成績が違っていた。男の方が断然優秀だ。気力が違っている。女子で昨年ずば抜けて例外的に優秀なものがいたが今年はそのようなのはいまいが、毎時間の簡単なテストからも女子は昨年より一般に良さそうだ。昨年の例だと、初めに比べると学年末になると格段の進歩を示していたが、男子の方が女子を断然おい抜いていた。前にも言ったように気力が断然違うのだ。今も男子と女子では大した差はないが、一月もするとそうなると思う。（「高校生活一ヶ月」『日比谷高新聞』9号〔1951年5月9日〕）

この記事を見ると、学力は男子のほうが明らかに優れていて、女子のほうが明らかに劣っている、と数学の教員によって把握されていることがわかる。

たしかに、高校の選抜に用いられたアチーブメントテストの結果を見ると、男子のほうが女子よりもテストの点数が高い。東京都教育庁の調査によると、1954年度の東京都公立高校全日制普通科志願者のアチーブメントテストは、総合得点が800点、男子の平均点が549・6点、女子の平均点が503点で、そのうち日比谷高校のある第1学区の男子の平均点は587点、女子の平均点は523・7点であった（東京都教育庁総務部調査課 1954：21）。したがって、全体の平均点は男子のほうが46・6点も高く、第一学区の平均点は男子のほうが63・3点も高くなっていたのである。

そのため、男女別定員による男女共学制が導入された後、東京都議会でも新聞でも、旧制中学系の高校において男子の合格点が女子のそれを上回っていることが問題視され、男女別定員による男女共学制にたいして批判が巻き起こっている（今田 2021）。たとえば東京府立第五中学校を前身とする小石川高校の校長の澤登哲一は、「今年の本校入学者を男女別にみると女子は二百三十四点で入学しているが、男子は三百七点以上でなければ入学できなかった（中略）。東京都が現在やっているように高校ごとに男女採用人員のワクをきめているのはやめた方がよいと思う」（「男女共学の是非」『読売新聞』1952年3月25日）として批判している。小石川高校ではアチーブメントテストの男子の合格点が女子のそれを大幅に上回っているとされ、それを根拠に男女別定員を撤廃すべきであるとしているのである。おそらく日比谷高校も、小石川高校のように男子の合格点が女子のそれを大幅に上回っていると思われる。そしてそれを問題視する者も少なからず存在していると推測することができる。だからこそ、日比谷高校では女子の学力が低いと把握され、そのことが問題視されていると考えることができる。

ただ、旧制中学系の高校は男子の合格点が女子のそれを上回っていたが、旧制高女系の高校は逆に女子の合格点が男子のそれを上回っていたようである。たとえば、東京市立忍岡高等女学校を前身とする忍岡高校の校長の小松直行は、「本校の入学者をみても一昨年は十五点、昨年は十点、今年は二点とアチーブ成績での女生徒の優位は次第に減少してきて」（「男女共学の是非」『読売新聞』1952年3月25日）いるとしている。忍岡高校ではアチーブメントテストの女子の合格点が男子のそれを上回っているが、しだいにその差が縮まってきていると捉えているのである。そう考えると、女子の学力が男子のそれよりも低いということは、旧制中学系の高校で起きていたことにすぎなかったといえる。なぜなら旧制高女系の高校では逆に、男子の学力が女子のそれよりも低いということが起きていたためである。したがって女子の学力が男子のそれよりも低いということはすべての高校に当てはまることでもなかったし、当然視できることでもなかったのである。

第二に、教室内の対人関係能力に差があるとされている。女子のほうが教室内で同性の友人を作ったり、維持したりする能力が低いとされているのである。たとえば次の記事にそのような捉え方を見ることができる。

古屋（古屋玉子——引用者）（中略）男性間の場合は深く結ばれて尊敬を伴っているが女性の場合はそう云う風にはいかないようです。（中略）

山口（山口仁——引用者）女の人の感情には友情なんか無い。愛情だけだと思う。（中略）僕の家でも父の友達だと今もって友情を持ちつづけているが母にはそんな事はない。

竹内（竹内恵子——引用者）私は女の人の人だって真の友情があると思います。

小川（小川登代——引用者）（中略）お父さんお母さんの友情云々ね、あれは因習だと思います。

山口（山口仁——引用者）いや、それも幾分あるかも知れないけれど根本的には女性本来の性格ということに原因しませんか？（「座談会 友情を語る」『星陵』2号 [1952年9月号]）

この記事に見られるように、男子は男子同士の関係を構築することができるが、女子は女子同士の関係を構築することができない、と男子生徒によって把握されていることがわかる。ただし、男子生徒はその根拠として自分自身の母親の例を挙げているが、その母親は戦前に教育を受けた世代、したがって進学の間もなく就業の間もなく男子に比べると乏しく、女子同士の関係を築く機会が男子に比べると十分に与えられなかった世代である。そのような戦前の教育を受けた世代の女子を根拠にして、戦後の教育を受けた世代の女子について断定することは妥当ではないといえる。そのため、男子生徒は女子生徒によって反論されていることも見てとれる。

ただ、このような把握の仕方は、1950年代の少年少女雑誌においても見られるものである。たとえば『女学生の友』（小学館）では編集者、作家、国会議員、純潔教育懇談会の委員たちが1956年ごろから女子読者に向けて男女交際を奨励しはじめ、その理由として男子の人格が女子の人格に比べて優れていること、だからこそ男子同士の関係のほうが女子同士の関係よりも優れていること、したがって女子は男子と交際したほうが得るものが多いことが語られていた（今田 2014）。このように男子同士の関係を称え、女子同士の関係を貶めることは、1950年代の少年少女雑誌においてもおこなわれていたことだったのである。

第三に、家事能力に差があるとされている。女子は男子と比べて家事能力をもっているし、もっていないとされているのである。たとえば次の記事にそのような把握の仕方を見ることができる。

滝沢（滝沢俊郎——引用者）（中略）今ここの教室を見ても、清潔にして授業を受けるという訓練ができていない。（中略）

嶺（嶺富佐子——引用者）女の人は大学に進学するにしても大体に於て将来家庭に入ることが前提になっておりますから、そんなに夢中になって自分の生活を支える為にとということで勉強する必要はない。そういう点から考えても何だか男みたいな女の人が男女共学の都立の学校には多いと思われるし、私などもそういうように非難されるのですが、今、滝沢先生の云われ

た教室のごみのお話にしてもそういう点は女の方が敏感に気が付かなければならないのではないのでしょうか。(「座談会 父兄・先生・生徒による今の学生問題について」『星陵』5号〔1954年2月号〕)

この記事に見られるように、女子は教室の掃除をするなど、家事能力をもつことが期待されているのである。

すでに見たように、女子は学力が劣っているとされて批判されている。一方、ここで見たように、女子は家事能力をもつことが期待されている。とすると、日比谷高校の女子は学力も家事能力も向上させなければならないとされていたということになる。主婦になることができるレベルにまで家事能力を向上させ、さらに東京大学合格者輩出数最多を誇る日比谷高校の生徒のレベルにまで学力を向上させなければならないということになるのである。しかしそれは至難の業である。したがって日比谷高校の女子を学力不振に陥らせている理由の一つには、このような日比谷高校の女子に学力も家事能力も期待するまわりのまなざしがあったのではないかと推測することができる。

第四に、言葉遣い・心遣いに差があるとされている。女子のほうが男子にたいして丁寧な言葉遣い・心遣いをすることができるし、しなければならないとされているのである。たとえば次の記事にそのような捉え方を見ることができる。

「君々！」最近もわれわれはよくこういつているのを聞く、そういつている人を見ると(中略)、れつきとした女生徒である。(中略)女子には女子としての言葉がある(中略)。言葉はその人の品性の表われである。大多数の男生徒の中にあつて女生徒が益々女らしくあつてこそいよいよその存在をはつきりさせると思うのだが、こう思うのは私一人だろうか。(中略)女生徒は言葉使いに注意するのはもちろん、男生徒も、そんな言葉で呼ばれたら返事をしない位の態度をとつたらどんなものだろう。(「焦点」『日比谷高新聞』12号〔1951年9月10日〕)

この記事で指摘されているように、女子は男子に丁寧な言葉遣い、「女らしい」心遣いをしなければならないとされているのである。

すでに見たように、日比谷高校において女子は女子同士の関係を構築する能力に劣っていると批判されている。いうまでもなく、女子同士の関係を構築するためには、女子が女子にたいして充分な心遣いをしなければならない。ところが、ここで見たように、日比谷高校の女子は男子に心遣いをすることが期待されている。とすると、日比谷高校の男子は男子に心遣いをするだけでよいが、日比谷高校の女子は男子女子の両方にまんべんなく心遣いをしなければならないとされていることになる。しかし現実にはそのようなことは困難である。したがって仮に日比谷高校の女子が女子同士の関係を構築することが不得手であったとして、その理由の一つには、女子にたいして男子を常に優先して心遣いをさせるこのようなまなざしがあったのではないかと推測することができる。

る。

このように『日比谷高新聞』『星陵』で指摘された男女の差異は、第一に女子のほうが学力に劣っていること、第二に女子のほうが教室内の対人関係能力に劣っていること、第三に女子のほうが家事能力を期待されていること、第四に女子のほうが男子にたいする丁寧な言葉遣い・心遣いを期待されていることであった。第一、第二は学業に関する能力、第三、第四はケアに関する能力として分類することができる。

#### 4 女子の不満

ここまで日比谷高校では男女の差が当然視されていることを見てきた。そうであるとすると、次に新たな疑問が生まれてくる。男女の差が当然視されていることによって、女子はどのような扱いを受けていたのだろうか。また日比谷高校の女子はその扱いをどのように受けとっていたのだろうか。ここでは『日比谷高新聞』『星陵』にあらわれた日比谷高校の女子にたいする扱い、および、女子のふるまいを見ていくことにする。

第一に、学力の男女差が当然視されることによって、女子は足手まといとして見なされている。そして女子はそのような扱いに不満を抱いている。それが明確にあらわれたのが、全クラス共学化のときである。すでに見たように、日比谷高校は1950年に男子300名、女子100名の募集定員を設定し、1950年4月7日の入学式には男子312名、女子90名を入学させ、新1年生の8ルーム(11～18ルーム)のうち、11、15、17、18の4ルームを共学のクラス、他を男子のみのクラスを設けた(日比谷高校百年史編集委員会 1979)。1951年も男子300名、女子100名の募集定員を設定し、1951年4月6日の入学式には男子310名、女子98名を入学させ、新1年生の8ルーム(11～18ルーム)のうち11、12、13の3ルームを共学のクラスに、新2年生の8ルーム(21～28ルーム)のうち21、22、23の3ルームを共学のクラスに、他は男子のみのクラスに設定した(日比谷高校百年史編集委員会 1979)。ところが、1952年には全クラスを共学のクラスにし、1クラスの男女の割合を男子3、女子1にすることにした(日比谷高校百年史編集委員会 1979)。『日比谷高新聞』14号(1951年11月22日)によると、これは女子生徒の要望によるものであるとされている。というのも、教師が女子生徒を集めて意見交換会をおこない、そこで女子生徒が共学クラスを希望していることが明らかになったためである。次の記事にそれが記載されている。

どんな意見かという、女生徒は、現在私達は非常な肩身の狭さを感じているが、これは男子だけのクラスと男女混合クラスがあるためだ。男子のみのクラスと混合クラスでは成績に格段の開きがある。これでは男子は益々向上しようとするのに女子はあきらめてしまうから、全部混合にしてのびのびと勉強しようというのだ。(「焦点」『日比谷高新聞』14号〔1951年11月22日〕)



この記事にあるように、女子は共学のクラス、男子のみのクラスが設定されていることに不満を抱いている。なぜなら男子のみのクラスのほうが、共学のクラスに比べてはるかにテストの平均点が高いからである。それが白日の下にさらされると、共学のクラスの平均点が低い原因は、女子の学力が低いこと、女子が共学クラスの平均点を下げていることであるとされて、女子が男子に責められることになる。そうすると、女子は自信をなくし、男子はますます自信を得ることになる。女子はそれを嫌がっているのである。

一方、『日比谷高新聞』では、大勢の男子生徒が全クラス共学化に不支持であることをほのめかしている記事、また、男性教師のなかにも全クラス共学化に不支持を表明する者が存在することを明らかにしている記事が掲載されている。たとえば次の記事である。

加川先生談（中略）共学は私としてはあまり賛成できない。男らしさ、女らしさが失われるんじゃないかと思う。（中略）

28R 児玉君談 共学なんて反対だよ。ちつとも良くならない。女子だつて現在のままか、女子だけの方がいいんじゃないかな、何しろ僕らのルームは皆反対だよ。（「来年度の方針 全HRに共学」『日比谷高新聞』15号〔1952年2月6日〕）

この記事に見られるように、男子のみのクラスに所属する男子生徒全員、および、男性教師が全クラス共学化不支持の意見をもっているとされているのである。

また『日比谷高新聞』の男子の記者も次のように全クラス共学化不支持の意見を表明している。

どうして（女生徒は——引用者）勉強しようという意欲がわかないのだろう。（中略）全部混合クラスにした結果女生徒と男生徒の比率も断然男が多くなり、かえつて圧迫を感じるのではないか。（中略）男女混合にする代りに、入学の時も全然性別を考慮に入れずに採用したらどうなのだろう。そうしたらそんなに女生徒の能力の下ることもあるまいし、何も圧迫を感じなくとも自由にやつていけよう。しかし、こんなことは“新教育”の趣旨、特に都教育庁の方針とは絶対に相容れないことかも知れない。（「焦点」『日比谷高新聞』14号〔1951年11月22日〕）

この記事に見られるように、男子の記者も全クラス共学化に不支持の態度をとっている。ただ、女子生徒が学力の低さを責められ、圧迫を覚えていることは十分にわかっている。そこで全クラス共学化をするのではなく、男女別定員をなくすことを提案している。そうすれば、男女の学力差は生まれなため、女子生徒が圧迫を覚えることはないというのである。ただし、それは「新教育」の趣旨にも、東京都教育庁のめざしているところとも反するかもしれないと捉えている。

一方、『日比谷高新聞』では、女子生徒は全クラス共学化に賛成の意を表明している存在として載せられている。たとえば次の記事である。

12R 土生さん談 全 HR の共学は大賛成です。いまよりも一歩進んだ改革だと思います。(「来年度の方針 全 HR に共学」『日比谷高新聞』15号〔1952年2月6日〕)

この記事に掲載されているように、女子生徒は全クラス共学化を「進んだ改革」として称賛しているとされているのである。

他にも、女子は学力の伸びに限界があるとして責められることについて、女子生徒が問題提起をおこなっている記事も載っている。

女の限界だとか女性は所詮協力者でしかあり得ないとかということは、現状では言われても仕方のないことかもしれない。しかし、これらの言葉の為に、どんなに私達が苦しまねばならぬか、また、こんな言葉の全くない社会を来すためにある人々がどれ程苦心しているか世の男性に知ってもらいたいと思う。(21R 阿部淑子「女性雑感」『日比谷高新聞』15号〔1952年2月6日〕)

この記事にあるように、女子は学力の伸びに限界がある、女子は協力者にしかかなり得ない、とまわりの人たちに言われるたびに苦しんでいることが女子生徒によって訴えられている。この発言をしている人が誰かについては明らかにされていないものの、おそらくまわりの男子生徒たちのことが含み込まれていると思われる。またこの女子生徒たちの苦しみをなくそうとして努力しているまわりの人たちの存在についても触れられている。この努力をしている人が誰かについても記されていないものの、おそらく女子を集めて意見交換会を開き、女子の要望を聞き入れようとしている教師たちのことが含蓄されていると思われる。

このような記事を見ると、女子は学力に劣ることが当然視され、男子は女子をテストの平均点を下げる存在として足手まといにしていることがわかる。一方、女子はそのような扱いに不満を抱いていることが見てとれる。

第二に、女子に家事能力があることが当然視されることによって、女子のみにトイレ掃除、模擬店の給仕が押しつけられ、男子に蔑視されている。そして女子はそれにたいして不満を抱いている。たとえば次の記事はそのことを指摘するものである。

女子生徒だけが便所の掃除をさせられているという不満の声がある。(中略)なぜ男子にはさせないことを女子にだけやらせるか、この差別待遇に不平を感じるというのである。それから文化祭の模擬店のことがある。模擬店で働いている女子生徒たちが三日間、模擬店にかんづめにされて、講堂の催物も展覧会もろくろくみることができなかつた。それなのに男子生徒たちは、まるで自分たちを給仕のように心得ている。

男子生徒と女子生徒との差別がひどすぎる。そればかりではない。男子の偏見は毎日の教室での授業でも、女生徒のべつ視となつてあらわれ、一寸した発言にも「女だてらに」とか、とかく

女子の台頭を押えつけようとする等と、女生徒側の男生徒側に対する非難と不平の声は、後をたたないようである。(「論説 女子生徒の問題」『日比谷高新聞』24号〔1953年2月2日〕)

この記事では、日比谷高校においては女子のみトイレ掃除をさせられていること、女子のみ模擬店の給仕をさせられていること、女子が教室のなかで蔑視され、なにか発言をするたびに「女だてらに」と非難されていることが問題視されている。そして女子の不満が高まっていることが指摘されている。

一方、女子はこのような扱いについてさまざまな形で抵抗をしている。『日比谷高新聞』においては二つの抵抗が見てとれる。一つはさまざまな形で意見を表明することがおこなわれている。たとえば、すでに見たように、『日比谷高新聞』に投稿したり、取材に協力したりして、意見を表明することがおこなわれている。また、これもすでに見たように、教師が女子生徒を集めて意見交換会を開催することがあるため、そこで教師に訴えることが実施されている。さらには、生徒会の議員選挙において意見を表明することがおこなわれている。『日比谷高新聞』によると、生徒会の議員選挙において「女子生徒のみが便所掃除をさせられるのは不当である」(「女子の御不浄掃除について澁谷先生は語る」『日比谷高新聞』24号〔1953年2月2日〕)とする発言があったと報道されている。

その後、女子のみトイレ掃除をさせられることはなくなっている。『日比谷高新聞』は衛生室の教師に取材をして、「便所掃除は本来ならば小使さんがやるべきものですが、あまり女子用便所が汚れるのでしつけの意味で女子用便所は女子にやつてもらっていたものです。近頃では水が洩れて不衛生なので女子にもやつてもらっていません」(「女子の御不浄掃除について澁谷先生は語る」『日比谷高新聞』24号〔1953年2月2日〕)という回答を得ている。

もう一つは、女子生徒が団結して男子生徒たちの決定を拒否することがおこなわれている。それが起こったのは1954年6月5日開催の日比谷高校の体育祭に向けて、生徒たちが準備を進めていたときのことであった。男子生徒のみで構成されている体育祭の準備委員会の委員たちが、女子生徒になんの意見も聞かず、女子生徒のみ体育祭でダンスを実施することを決定した。そして、そのことを説明会で不意打ちのように女子生徒たちに知らせたのであった。その結果、女子生徒は一丸となってダンスをすることを拒否した。『日比谷高新聞』は次のように報道している。

強硬に反対されたのは準備委員会の『決め方』にあつたようである。(中略)或程度決定的になつてから説明会が開かれ、その間に女生徒の意見が何等聞かれなかつたという点である。(「論説 君が代とダンスの問題」『日比谷高新聞』35号〔1954年5月29日〕)

この事件をながめると、男子生徒が女子生徒を無視して校内のことを決めていることをうかがうことができる。

その後、この事件は和解している。準備委員会の委員である男子生徒たちは女子生徒たちを説得し、女子生徒たちはダンスを実施することになったのである。しかし、1955年6月4日開催の体育祭では、準備委員会の男子生徒たちと女子生徒たちの協議の結果、男女混合でフォークダンスをすることになっている（「明日盛大に体育祭」『日比谷高新聞』42号〔1955年6月3日〕）。

このように、日比谷高校では男女の差が当然視されているため、女子は男子と異なる扱いを受けている。第一に男女の学力差が当然視されることで、女子が足手まといにされている。第二に、女子に家事能力があることが当然視されることで、女子に家事労働が押しつけられている。どちらにおいても女子は不満を抱いている。したがって女子はさまざまな形で意見を表明し、また団結して抗議しているのである。

## 5 「男子校」という枠組み

ここまで女子が男子と異なる扱いを受けていたこと、そしてそのことによって女子の不満が高まっていたこと、そのため意見を表明したり、抗議したりしていたことを見てきた。それではこのような女子生徒の抗議にたいして、男子生徒はどのように対処しようとしていたのだろうか。ここでは、男子生徒が女子生徒の抗議にたいして示した対策案を見ることにする。

『日比谷高新聞』では、女子にたいする差別がどのようにしたらなくなるのかについて、男子生徒が二つの案を提示している。第一は女子には男子と異なる教育を実施するべきであるというものである。

男子校に何故女子が入ってくるのか、それをあえてする以上女子が圧迫されるのも仕方がない、というのが男子生徒の一致した見方のようである。（中略）

女子生徒は「男子の生徒は家に帰つてすぐ勉強することができるのに、わたしたちは家に帰つても仕事があつてすぐ勉強することはできない（中略）」という。明らかにそこには「女子」としての特殊な立場、女子教育の特殊な問題があるのであつて、特に男子校に入つた「少数の女子」の教育をどうするかということは、さきの差別待遇の問題とともに極めて重要なのではないかという気がする。この解決に一つの途をあたえるものは「女子生徒会」と「女子父兄会」である。（「論説 女子生徒の問題」『日比谷高新聞』24号〔1953年2月2日〕）

この記事は男子記者が執筆したものである。この記事では、女子には女子のみが抱えている問題があるとしている。それは女子が家事労働をしなければならないため、十分に勉強ができない、学力を上げることができないというものである。そのため、女子には女子のための教育を実施するべきであるとする。すでに見たように、日比谷高校の女子は学力も家事能力も向上させなければならないという圧力のなかに存在していた。男子記者はこのことを指摘しているのである。

女子が学力も家事能力も向上させなければならないという圧力を受けていたことは、『日比谷高新聞』の実施した生徒の睡眠時間に関する調査、および、生徒の健康に関する調査からもうかがうことができる。表1は『日比谷高新聞』が実施した生徒の睡眠時間に関する調査、表2は『日比谷高新聞』が実施した生徒の健康に関する調査である。『日比谷高新聞』はこの調査結果に基づいて1、2、3年生の比較をおこない、3年生の睡眠時間が少ないことを指摘しているが、男女の比較はおこなっていない（「睡眠は平均七時間半 本校生の健康について」『日比谷高新聞』11号〔1951年7月19日号〕）。そのため、ここでは男女の比較をおこなうこととする。

この表1を見ると、学年が上がるにつれ、女子の睡眠時間が少なくなっていることがわかる。1年生は男子も女子も8～8.5時間の睡眠時間をとっている生徒がもっとも多く、男子60%、女子41.4%を占めていることがわかる。しかし2年生では男子は8～8.5時間、9～9.5時間の睡眠時間をとっている生徒がもっとも多く、どちらも28.6%の割合であるが、女子は7～7.5時間の睡眠時間をとっている生徒がもっとも多く、58.8%の割合である。3年生は男子のみで7～7.5時間の睡眠時間をとっている生徒がもっとも多く、51.7%を占めている。このような調査結果をながめる

表1 日比谷高校生徒の睡眠時間 (%)

時間	1年生		2年生		3年生
	男	女	男	女	男
5～5.5	-	6.9	-	-	3.4
6～6.5	6.7	10.3	14.3	11.8	17.7
7～7.5	20.0	20.7	21.4	58.8	51.7
8～8.5	60.0	41.4	28.6	17.6	20.7
9～9.5	13.3	10.3	28.6	11.8	-
10～	-	10.0	7.1	-	6.9

注：1年生（11R）、2年生（22R）、3年生（34R）に実施

出典：「睡眠は平均七時間半 本校生の健康について」『日比谷高新聞』11号（1951年7月19日号）より作成

表2 日比谷高校生徒の健康（実数）

項目	1年生		2年生		3年生
	男	女	男	女	男
食欲良好	9	16	8	7	15
食欲不振	4	7	4	9	13
微熱がでる	0	1	1	3	2
寝不足	3	8	0	3	14
盗汗をかく	0	1	0	2	3
精神的疲労	0	4	2	4	7

注：1年生（11R）、2年生（22R）、3年生（34R）に実施

出典：「睡眠は平均七時間半 本校生の健康について」『日比谷高新聞』11号（1951年7月19日号）より作成



と、学年が上がるにつれて睡眠時間が少なくなっていることがわかる。これは受験勉強の時間が増大するためであると思われる。さらに2年生においては女子のほうが男子に比べて睡眠時間が少なくなっていることが見てとれる。これも受験勉強の時間が増大するためであると思われる。2年生になると、男女ともに受験勉強の時間が増大するが、それにもかかわらず女子のみ家事労働の時間があるため、女子のみ睡眠時間を削らざるを得なくなっていると推測することができる。

また表2を見ると、女子に寝不足、精神的疲労を訴える者が多いことが見てとれる。1年生は「寝不足」が男子3人、女子8人、「精神的疲労」が男子0人、女子4人である。2年生は「寝不足」が男子0人、女子3人、「精神的疲労」が男子2人、女子4人となっている。3年生は男子のみで「寝不足」が14人、「精神的疲労」が7人である。この調査結果を見ると、女子のほうが男子に比べて寝不足、精神的疲労を訴える者が多いことがわかる。これも女子が勉強をしつつ、家事労働をしているため、睡眠時間が少なくなったり、精神的疲労に陥ったりしていると推測することができる。

このように、日比谷高校の女子は学力も家事能力も向上しなければならないという圧力を受けつけていることがうかがえる。男子記者はこのような女子のみが置かれている環境を考慮して、女子には女子の教育を実施するべきであるとしていたといえる。

第二は、女子には男子と同一の教育をするべきであるというものである。

女子への特殊教育などはやめてしまうことである(中略)。女も男と同じ教育をうけて同じように能力の全面的な発達と自由な発展を保障されることである。そしてそのことこそ、男女共学の目的とする所ではなかつただろうか。それなのに今日の共学は、しかたなしにやつているというような感をまぬがれない。

この問題の解決にあたって何よりも大切なのは先ず女生徒自身の自覚であろう。旧男子校に入ったからといって、居候みたいになくなっている必要は毛頭ない。何故男女が平等でなければならないのかをはつきり認識して堂々と権利を主張すべきである。(21R 関根松実「共学について」『日比谷高新聞』25号〔1953年3月14日〕)

この記事では女子には男子と同一の教育をするべきであるとしている。そして女子の自覚を促すことがなによりも大切であるとしているのである。

この二つの記事を見ると、男子生徒たちは、女子には男子と異なる教育をするべきか、同一の教育をするべきかを議論していたことがわかる。どちらも女子をどのようにするかを議論するもので、男子をどのようにするか、教師をどのようにするか、日比谷高校をどのようにするかを議論するものではなかったといえる。したがって、どちらも「男子校」「旧男子校」に女子が「入つてきたと捉えていて、女子に「男子校」「旧男子校」に馴染むためのなんらかの努力を促そうとしているのである。「男子校」「旧男子校」を新しい共学校に改革するものではなかったと捉えることができる。

## おわりに

本稿は、東京都立日比谷高校の生徒が男女別定員による男女共学制導入をどのように捉えたのかを明らかにした。

最初に、東京都の新制高校の男女共学体制導入を見た。1948年度、東京都の新制高校はすべて男女別学体制で誕生した。とくに旧制中学校、高等女学校を前身とする新制高校は、その枠組みをそのまま引き継ぐ形で生まれたのであった。しかし、軍政部が圧力をかけてきたため、1949年度、いくつかの高校が男女共学制を導入し、1950年度、全高校が男女共学制を導入した。1950年度、男女共学制を導入するにあたって、全日制普通科の高校は男女別定員による男女共学制を実施した。その結果、旧制中学系の高校には男子が、旧制高女系の高校には女子が4分の3を占めるといふ偏りが生じることになったのであった。このように東京都の新制高校が男女共学制を導入するなかで、日比谷高校は1950年度、男女別定員による男女共学制を導入した。

このことを踏まえて、次に日比谷高校の生徒たちの把握の仕方を見た。1950年度は、男女の差だけでなく、旧制・新制の差があったため、男女の差が見えにくくなっていた。むしろ新制の生徒のなかでも女子生徒は、旧制のアイデンティティである「無秩序」「個性」を体現する存在であるとされており、男女の差がわかりにくくなっていた。そのため、大きな混乱はなかったのであった。しかし1951年度、旧制の学年が少数派になると、男女差が可視化されてくる。その男女差の可視化は4点の男女差を当然視する形でおこなわれていた。その4点の男女差とは、①学力に男女差がある、②教室内の対人関係能力に男女差がある、③家事能力に男女差がある、④言葉遣い・心遣いに男女差があるというものであった。①②は学業に関する能力で、③④はケアに関する能力だといえる。そして①②は男子のほうが秀でていとされ、③④は女子のほうが秀でていとされていたのである。さらにこのような男女差の当然視によって、女子は男子とは異なる扱いを受けていた。①学力の男女差が当然視されることで、女子は足手まといとして見なされ、②家事能力の男女差が当然視されることで、女子のみ家事労働を押しつけられ、また、蔑視されていたのであった。そのため、女子生徒の不満が噴出していった。女子生徒は一つには新聞、雑誌に投書する、教師が設けた意見交換会で意見を表明する、生徒会で訴えるなど、さまざまな形で抗議の意を表明していた。二つには女子生徒が一丸となってダンスを拒否するなど、集団による抗議行動もおこなっていた。一方、男子生徒は女子生徒の不満に対処するため、女子にたいしてa「男子校」の枠組みの枠外で男子と異なる教育を施すか、b「男子校」の枠組みの枠内で男子と同一の教育を施すかを議論していた。したがって、「男子校」の枠組みは温存したまま、女子をその「男子校」の枠外に排除するか、あるいはその「男子校」の枠内に置いて「男子校」に馴染む努力をさせるかを論じていたのであった。

1950年度、東京都が男女共学制を導入したとき、大きな弊害はなかったといわれている。本稿

が日比谷高校生徒の男女共学制導入に関する把握の仕方を明らかにするなかで、なぜ大きな弊害はなかったといわれているのかが見えてきたといえる。まず、1950年度は、旧制・新制の差異が大きく、男女の差異は小さいものとされていたことが浮かび上がってきた。そのため、大きな混乱は生じなかったのである。次に、1951年度からは、男女の差異が大きなものとなったものの、女子生徒を「男子校」の枠外に排除するか、あるいは、女子生徒を「男子校」の枠内に置いて「男子校」に馴染む努力をさせるか、そのどちらかを模索することによって、「男子校」の枠組みは維持されていたことがわかってきた。たしかに女子生徒は、男子生徒とは異なる扱いをされていた。そしてそのことに不満を抱き、抗議をおこなっていた。そう考えると、弊害はあったのである。しかし、大きな弊害とは見なされなかった。なぜなら、女子生徒を「男子校」に入ってきた女子生徒」として把握して、女子生徒を「男子校」の枠外に排除するか、「男子校」の枠内に入れて「男子校」に馴染ませるか、そのどちらかをおこなおうとしていたためである。どちらをおこなっても、「男子校」の枠組みは維持される。そのため、大きな弊害とは見なされなかったのである。

なぜ女子に「男子校」に馴染む努力をさせようとしたのだろうか。いいかえると、なぜ男子にはなんの努力ももともとめていなかったのだろうか。それは①学力に男女差がある、②教室内の対人関係能力に男女差があるとされ、①②においては男子のほうが女子よりも秀でているとされていたためであると推測できる。①②の学業に関する能力においては、男子のほうが女子よりも秀でているとされているため、女子は努力して男子のレベルまで学力を上昇させ、また、男子のレベルまで対人関係能力を上昇させるべきであると把握されていたのである。一方、男子は劣っているとされている女子に合わせて学力を下降させ、対人関係能力を下降させることはもとめられなかったのである。いうならば、男子が「標準」とされ、女子が「標準」よりも下に置かれていたため、男子の「標準」のレベルに合わせるのが当然視されていたと考えることができる。一方で、③家事能力に男女差がある、④言葉遣い・心遣いに男女差があるとされ、③④においては女子のほうが男子よりも秀でている（べきである）とされている。したがって女子は①②の学業に関する能力も上昇させ、なおかつ、②③のケアに関する能力も上昇させなければならないという圧力を受けていたといえる。そしてそれは現実には困難であったと把握することができる。

『日比谷高新聞』『星陵』を見ると、男子生徒のほうは「男子校」を維持しようとしていたことがわかる。したがって、男女別定員による男女共学制導入に利益を見出していなかったと考えることができる。「新教育」の趣旨」「都教育庁の方針」（「焦点」『日比谷高新聞』14号〔1951年11月22日〕）として仕方なく受け入れていたと捉えることができる。だからこそ、1952年度、日比谷高校が全クラス共学化をおこなおうとしたとき、それに不支持を表明する男子生徒があらわれたのである。なぜ男女別定員による男女共学制導入に利益を見出していなかったかという、この男女別定員による男女共学制が、アチーブメントテストの合格点における男女差を生み出し、日比谷高校においてはアチーブメントテストの合格点の低い女子を受け入れることになったためであると推測することができる。すでに見たように、戦後のある時期まで、日比谷高校は東京大学合格者輩出数

において全高校の頂点に君臨している。しかし、その頂点の座もけっして安泰なものではない。学歴獲得競争が激しくなるにつれて、日比谷高校の生徒も他の高校の生徒と苛烈な学歴獲得競争をおこなわなければならない。そのようななか、日比谷高校の男子生徒は学力の低いとされる女子生徒を足手まといとして捉えていたと見ることができる。

そうであるとなると、男女別定員は導入当初の1950年度の時点から問題視されていたと捉えることができる。すでに見たように、この男女別定員は今日においてはジェンダー不平等の仕組みであるとして問題提起されている。2021年9月4日、東京都教育委員会が公表した、2021年度の東京都立高校入学試験の分析結果によると、男女別定員を設けている110校のうち、56校で女子のほうが合格点が高く、18校で男子のほうが合格点が高く、36校で男女差がなく、さらに男女合同定員なら合格していた不合格者は、女子で約700名、男子で約100名いたとされている（『都立高入試の男女別定員、段階的に廃止へ 合格ラインに男女差』『朝日新聞』2021年9月24日）。この新聞報道を見ると、男女別定員については、今日においては女子の合格点が高くなっていること、したがって女子が不利になっていることが問題視されているといえる。しかし1950年代においては、おもに旧制中学校系の高校において、男子の合格点のほうが女子のそれよりも高くなっていること、したがって男子が不利になっていることが問題視されていたのである。そのため、男子生徒たちの不満が高まって、女子生徒を厄介者扱いする事態が生まれていたのである。

すでに見たように、東京都の新制高校は旧制中学校、高等女学校、旧制実業学校の枠組みを引き継ぐ形で誕生した。したがって日比谷高校も、東京府立第一中学校の枠組みを維持する形で生まれたと捉えることができる。このことによって、日比谷高校は「男子校」の枠組みを強固に持ち続けることになった。そして、『日比谷高新聞』『星陵』を見る限り、男子生徒たちはそれに加担することになったのであった。男子生徒は「男子校」の枠組みを破壊されないように、「男子校」に女子が入ってきた」と捉え、女子には「男子校」の枠外に排除するか、「男子校」の枠内に置いて「男子校」に馴染ませるか、どちらかを提案した。どちらにおいても、「男子校」も「男子校」の男子生徒もなんら影響を受けることがない企てであった。こうして男子生徒は「男子校」の枠組みの維持に加担し、女子生徒はそれに不満を噴出させていたのであった。

ただし、本稿は旧制中学系の高校に焦点を当てることはできたが、旧制高女系の高校に焦点を当てることはできなかった。旧制中学系の高校は女子を「男子校」の枠外に置いて排除するか、「男子校」の枠内に置いて「男子校」に馴染ませる努力をさせるか、どちらかの道をとろうとしていたが、果たして旧制高女系の高校も男子を「女子校」の枠外に置いて排除するか、「女子校」の枠内に置いて「女子校」に馴染ませる努力をさせるか、どちらかの道をとろうとしていたのだろうか。このような問いが浮上してくる。しかし、本稿はこのような問いに取り組むことはできなかった。のちの課題としたい。

## 注

- 1 資料の引用にあたっては、旧字体は原則として新字体に改めた。また読みやすさを考慮して適宜句読点を補った。さらに、明らかな誤字は修正した。

## 参考文献

- 今田絵里香 2014 「異性愛文化としての少女雑誌文化の誕生」小山静子・赤枝香奈子・今田絵里香編『セクシュアリティの戦後史』京都大学学術出版会、57-77
- 今田絵里香 2021 「男女比に大きな偏りのある男女別定員——東京都の男女共学」小山静子・石岡学編『男女共学の成立——受容の多様性とジェンダー』六花出版、149-176
- 小野寺みさき 2013 「戦後都立高等学校における男女共学制の導入過程」『早稲田大学大学院教育学研究科紀要』別冊20-2、13-24
- 小野寺みさき 2014 「都立高等学校における男女別入学定員の変遷」『学術研究（人文科学・社会科学編）』62、53-68
- 如蘭会 1958 『尋一中日比谷高校 八十年の回想 母校創立八十周年回想録』
- 東京都立教育研究所 1966 『戦後東京都教育史中巻（学校教育編）』
- 東京都教育庁総務部調査課 1954 『昭和29年東京都学力検査に関する調査』
- 東京都立白鷗高等学校 1989 『百年史』
- 日比谷高校百年史編集委員会 1979 『日比谷高校百年史』上、中、下

## 史料

- 『朝日新聞』朝日新聞社、1949年3月13日、2018年8月2日、2019年2月9日、2021年9月24日
- 『教育時報』東京都教育庁調査課、7号（1948年8月号）
- 『星陵』日比谷高校雑誌部、1号（1952年3月号）～9号（1956年3月号）
- 『東京都教育概要』東京都教育庁、1949年度
- 『東京都の教育』東京都教育委員会、1951年度
- 『日比谷高新聞』日比谷高校新聞部、1号（1950年4月25日）～47号（1956年3月16日）
- 『読売新聞』読売新聞社、1949年3月13日、1952年3月25日